

近代哲學における宗教的要素の問題

——ハイムゼート「近代の形而上學」——

近代哲學は中世の教會中心的神學的體系からの離脱によつて成立したといわれている。しかし、この通説にも拘わらず、近代哲學の諸體系がその環境であるキリスト教的ヨーロッパ世界の宗教的狀態や宗教的確信といかに深く連關しているかという事を明らかにすることは、我々の近代哲學研究にとつて、決定的に重要なことであると考えられる。近代哲學におけるこのような宗教的要素の解明こそ、ハイムゼートの名著「近代の形而上學」(Heinz Heimsoeth: *Metaphysik der Neuzeit*, München und Berlin, 1934)の主題目とするところである。

近代哲學をその先行する時代の哲學から區別するものについては、多くの論議が重ねられているのであるが、ここにもつとも重大なモメントとしてつぎの三つがあげられるであろう。

(1) 自律的な理性的思考の確立、即ち、哲學的傳統や神學的「全書」という均一的な總合性から獨創的自律的態度への人間精神の解放。(2) 現世(此岸性)への世界觀的轉向、即ち、神性に對する人間性の自覺に伴う神學からの哲學の獨立。(3) 科學的方法の成立、即ち、經驗的な類推的思考に對して嚴密な歸納的推理がとつて代つたことによる科學的「方法」意識の成立。この三つのモメントが近代哲學の近代性を構成することはまず認め

近代哲學における宗教的要素の問題

られてよいであろうが、これらのモメントによつて近代哲學が中世哲學から完全に區別されるかということになると事態はそう單純ではないのである。「ルネッサンス」と「宗教改革」という歴史學の概念は、哲學の領域においては、さまで意味の充實した概念ではない。というのは、パラケルススやブルノーをルネッサンスの哲學者として、ヴァイゲルやヘーメをプロテスタントとして、説明したとてそれはこれらの思想について本質的なことを語つたことにはならないであろうからである。

中世哲學のうち(ドンス・スコトゥスやオツカムや十四世紀の後期スコラ哲學)にも近代哲學の胎動をきくことはできるのであるが、それとともに、近代哲學のうちにも中世哲學の遺子が残存している點を、我々が十分に見きわめることなくしては、我々は近代哲學の十全の把握を期することはできないであろう。近代哲學は、その問題の設定の仕方において、キリスト教からな絶対的な影響をうけているのである。というのは、哲學は世界並びに人間の諸問題の全體にかかわることをもつて根本態度とするが故に、宗教との連關をたちきり得ないからである。近代における哲學者たちの一般的目标は、實に「信仰と知識とを宥和し、キリスト教哲學を建設し、宗教の大真理を形而上學的思辨によつて哲學的概念の明晰な形式へ高めん」とするところにあつたといわれる。

キリスト教から或る程度の距離を保つている哲學者(スピノーザ)においても、或はそれと意識的に抗争する哲學者(ニー

チエ、E・V・ハルトマン）においてさえも、多くの點においてキリスト教の深い痕跡が認められる。理性の「原理」から出發するといわれるデカルトの「省察」ですら、根本においては、「神の存在……を論證する第一哲學についての省察」にほかならなかつた。従つて、その「方法」においてデカルトは最初理性の巨匠として現われるが、二頁ききえゆくと坊主のような推論をするというスタンダールの非難もあながち不當とはいえないかも知れないのである。またカントは、道徳法則を神意のうちにではなくして意志「實踐理性」の自律の原則のうえに基礎づけ、人間の意志を神の命令に服従せしめる倫理説を他律として斥け、從來の道徳と宗教との關係を逆轉せしめ、道徳意識の歴史に新時代を劃した哲學者であるが、そのカントでさえ、「信仰に場所をあげるために知識をとりのぞいて、神の存在を要請」している。フイヒテにおいても、キリスト教的な生活態度が形而上學の表現をとつてあらわれ、世界過程は人類の精神的發展における神の啓示とされている。なお、シェリングはとくにその後期の哲學において完全にキリスト教哲學を構想し、世界現象をテオゴニー的過程として把握している。また、ヘーゲルにいたつては、神と世界とを宥和させるその三位一體論においてキリスト教を絕對精神に高め、キリスト教の精神的内容は思辨哲學が概念的に展開するものをただ表象的に物語るだけの造いがあるにすぎないとしているのである。

このように、宗教的要素は、近代哲學において、意外と思われるほどの勢力を振つていたのであるが、それとともに、それ

はまた近代資本主義精神の成立をも助成すること多大なるものがあつたことは、マックス・ウェーバーの卓越した業績の示すところである。即ち、ジアン・カルザンにはじまる禁欲的なプロテスタンティズムの倫理が經濟觀念や經濟形式の成立をいかに制約するかの問題をとりあつた（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）は、教條もしくは教團の成員たることは紳士たる道徳的資格を有することの現世的證明でありそれはとりも直さず經濟的には無條件的な信用の確保を意味し、合理的な近代資本主義の發展に重要な役割を果したことを巧に分析している。

このように強固であつた宗教的傳統の地盤の上にも今世紀にいたつて或る程度の變動が起きつつあることは事實である。しかしそれが依然として強力であることは、カトリシズムの旺盛な宗教活動に端的に表明されている。そしてこのカトリシズムと對立的な實存哲學においても、人間を現に投げだされている事實性において把握しようとするハイデッガーの哲學は「神なき神學」といわれ、ハイデッガーに比してカトリック的なヤスパースは超越としての神の問題としている。

今日、また一方において科學が技術並びに機械と結合して飛躍的な發展をとげ、哲學はいわば科學と宗教から挾撃されている形にある。しかし、科學も宗教も何らかの意味において前提から出發する思考であるに對し、哲學は、本來、無前提的思考であるところに、依然として兩者に對する獨自の存在理由を主張することができるといえるであらう。

（中村正雄）